

代々木病院の理念

ヒューマニズムにもとづく医療・介護の実践

くらしと健康

発行 医療法人財団 東京勤労者医療会 1部60円

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷1-30-7

TEL 03(3404)7661

E-mail address yo_sosiki@tokyo-kinikai.com

友の会会員は会費に購読料がふくまれています。



参加者の後ろではオブジェ・「サン・チャイルド」が放射能におびえることのない未来を見つめている

それは、まだ5月だというのに汗ばむような青い空の広がる朝でした。5月19日、都立第五福竜丸展示館（江東区）に渋谷原水協を代表して東京土建から5人、あかつき印刷から新人研修も兼ねて5人、そして、この企画の主催者・代々木病院原水禁実行委員会から2人が集まりました。

展示館で最初に出迎えてくれたのは、核・被爆（被曝）なき未来の世界を生きる子供をイメージした「サン・チャイルド（太陽の子）」の巨大な像。その凛とした表情と視線の見つめる先には、防護服を脱ぎ放射能に汚染された土・水・空気におびえることのない未来が、右手には希望の象徴・太陽を載せ、しっ

「核や戦争。何も関係ない動物や植物は、ただただ大迷惑」

第五福竜丸から 福島へ

安田さんの説明に真剣に耳を傾ける参加者が遠洋マグロ漁船だっ話を聞くと、こうや見ると「まぐろ力ツカレ」を頼張り、来年もこの場所に必ず戻って来ようと心に誓った。東葛病院 診療部医師研修担当 加藤 翼

取り残された患者さんの救済を



待合室だけでなく廊下も使って問診

今年2月、国が水俣病被害者救済特別措置法に基づく申請を7月末で打ち切り、以後健康調査はしないと明言しました。これを受けて、不知火患者会や全国医連などで組織する不知火海沿岸住民健康調査実行委員会は、水俣病の汚染の実態を明らかにし、全ての被害者救済実現のために6月24日に現地で一斉検診を行うと発表しました。このような情勢の中、代々木病院でも5月27日に「関東水俣病検診」を実施しました。

水俣病検診―職員など 約80人参加、32人受診

医学生室 山本希美

当日は、関東圏の医師、看護師、その他様々な職種約80人が参加。検診にきた患者さんは34人で、受付後、問診・診察・弁護士の相談を受けて頂きました。

「若い時から、手先がぶきゅぶきゅだからね、細かい作業ができないのよ。熱いか冷たいかも感じないし、料理の味だってよくわからないから、いつもお父さんの役割なの」と笑いつつ話を聞いて下さった人もいました。また、他の患者さんは、「これまで農水省で働いていたから、検診には来れなかったけど、弟に言われて来た」など、そ



複数のスタッフで細かい点も聞きとる

それぞれの事情や思いを抱いて、今日ここに参加していることが何えました。医師の診察では、水俣病と診断され泣き出し、今度の検診でも政府の救済打ち切りは、現状とかけ離れた「打ち切り」

千駄の萱

先日亡くなった新藤兼人監督は、インタビューの中で(自身が)

「だから原爆についての映画やドキュメントを撮り続けてきたけれど、原爆が落ちた瞬間を撮っていないので物足りない」と語っていた。なんとしても原爆の恐ろしさを伝えたいのであろう▼2011年現在、被爆者の平均年齢は77歳を超え、1年間で8千人が亡くなった。近年、沈黙を守ってきた被爆者の中には、何とかあの惨状を後世に伝えたいと、重く閉ざした心の扉を開き、初めて他人に話そうという人が増えてきた。原爆投下から66年、時間的な「距離」が拡大する中、人々の記憶から原爆への「恐怖感」が消えつつある▼熱線が一瞬にして焼き殺された人々や、後遺症で苦しむ被爆者がどんな目にあっているのか、思想・心情を超え想像をしてみよう。人類は核兵器全廃に向け、その「非人間性」「残酷さ」を継承し伝えていかなければならない。(た)